**特別講演要旨**

**断想－アイリス・マードック**

**蛭川　久康**

　当日、標記の題目を「自転車」、「一角獣」、「もうひとつの断想－アイリス・マードックを想う」の３部構成として話をしました。ここではその際の資料のうち、第一部と第二部に多少の補筆を施して、また第三部については話したことを文章化してここに再録します。

§１　自転車
１．映画《アイリス》におけるサイクリングの場面
２．J.Bayleyの一目惚れ（1953, Oxford）　JB28歳／IM34歳→*Iris, A Memoir of Iris Murdoch*（1998）
３．タイムズ紙　I M追悼記事（1999・2・9）
４．Philip Morrell　の一目惚れ（1899, Oxford）　PM29歳／OM26歳→M.Seymour : *Ottoline Morrell*
５．自転車の登場と流行
　　自転車の原型の登場は１８１８年頃だが、１８８８年に空気入りタイヤの採用により爆発的人気をよび、サイクリングは新しい野外スポーツとして定着する。ブームの頂点は１８９５年前後か。→『パンチ』（1895・5・18他）．
６．夏目漱石 : 『自転車日記』明治36年（1903）６・２０．『ホトトギス』．
７．野上弥生子 : 『欧米の旅』（下）, 1943,　岩波書店．野上のオックスフォード訪問は１９３８年.

　以上、研究余話にひとしい周縁・瑣末な事項を羅列した負い目を感じながらも、瑣事と思えることも時として重大なメッセージと無縁ではないだろうという期待と、また一見ばらばらに思えることがにわかにある一点に収斂する快感に逆らえぬまま、この楽しみを他と共有したくあえて本日の話題のひとつにしました。

§２　一角獣
１．頻出する「自我の剥落」の瞬間
２．媒体としての視覚芸術／小説と視覚芸術の接近あるいは水のイメージ（「泳ぐ」ということ）に託した小説家の寓意
３．作品に具体例を探る
例えばa.『鐘』の場合 : 審美的体験によるドーラの変容
　b.『一角獣』の場合 : 底無し沼におけるエッフィンガムの変容
４．I. Murdoch : “The Sublime and the Good”, *Chicago Review,*（Aug. 1959）
５．マードックの認識論→道徳哲学→第３代シャフツベリ伯爵（1671-1713）
Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl of Shaftesbury, *Characteristics* （1711）
道徳感（a sense of moral）を鍵語として→道徳的芸術観
６．善と美と愛（ときに自由）が等号でむすばれるイギリス固有の芸術風土

§３　もうひとつの断想 ： アイリス・マードックを想う
　マードックは現実を捉えて、わたくしたちお虜にしてやまない、喜びと苦しみの入り交じる偶発性に満ちた状況と認識しました。実作中の諸人物の多様な生態はこの海にも譬えられる状況を愛とか自由を希求しつつ喜劇的にときには悲劇的に泳ぎきろうとする姿を巧妙極まりない結構のうちに提示して見せてくれたのでした。そして小説家アイリス・マードックはこの世の海を真摯に力一杯泳ぎながら、それでも最晩年、あれほど泳ぎの達人つまり自由人であると思われたその本人が、人生の偶発性の波に呑み込まれつつこの世を去ったことに、わたくしたちは、映画が語るのをまつまでもなく、あるいは彼女が全仕事に託したメッセージを想起するまでもなく、いまさらながら人生の偶発性のなんたるかをもろに突きつけられた思いが強いのです。

　にもかかわらず、わたくしたちがなす術もなくただただたちすくむのではなく、まだまだ生きることの豊かな手応えをてばなさないでいることができるのは、ジョンとアイリスの二人が互いに相手を独立した一個の相棒、他者として認識しあうことによって、再び言えば映画をまつまでもなく、愛と献身の時間を、最後までと言うことが許されないのはまことに残念ですが、共有したと信じることができるからです。この確信こそが現実のともすれば凶暴な偶発性に立ち向かうことができるわたくしたちに残された唯一の砦なのではないでしょうか。